

木橋

永山則夫



木 橋



1984年7月15日 第一刷発行

定価1100円

著者住所 = 墨124 東京都葛飾区小管1-35-1-A

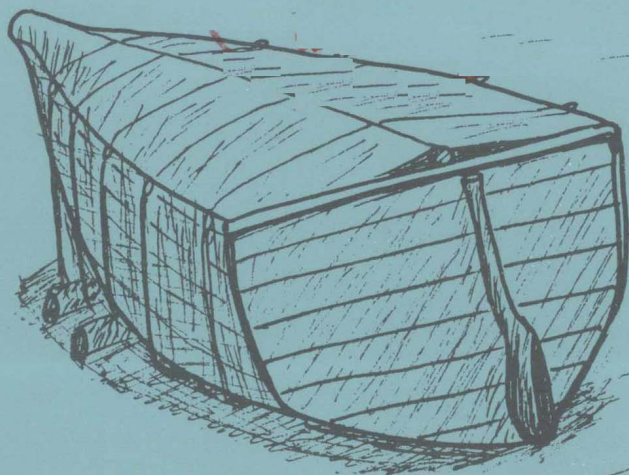
木 橋

著 者	永 山 則 夫
発行者	下 野 博
発行所	㈱立風書房
〒141 東京都品川区東五反田3-6-18	
☎ 東京 03(447)1191	振替(東京)5-74493
印刷所	図書印刷㈱
製本所	㈱難波製本

©Norio Nagayama 1984 Printed in Japan
ISBN 4-651-66030-4

本書についてのご意見ご感想は
〒141 東京都品川区東五反田1-23-6 都ビル4F
立風書房出版部あてにおよせくだい

落丁乱丁本は、小社負担にておとり替え致します



木
橋
／
目
次

あとがき

253

螺旋

213

なぜか、アバシリ

183

土堤

99

木橋

9

木

橋

挿 装
絵 幀

永 田
山 村
則 義
夫 也

木

橋

町には北へくだる川が流れていた。町は、その川沿いの片側に面し、北へ向かう道路と南へ向かう道路とを挟むように、町の中心となる家並みをもっていた。その道路はコンクリートを敷いていたが、北と南の両隣りの町へ向かうまでには同じように道々にところ亀裂を表出し、その裂け目を風化させていた。この町に近づくほどに、亀裂の多い、貧しいコンクリート道路であつた。

この県道は、南へくだると県下の二大都市を結ぶ国道に中間点で接続していた。その国道は、アスファルト舗装されていた。自転車で大城下町へ向かう人々は、この国道に入ると走行がはかどるので、一安心していた。この県道と国道を結ぶ交差点から、さらに南へ七、八里ほどくだると、北国の二大学園都市の一つの城下町ひろさき弘前の中心街に入る。この城下町には、平野からすっか

り雪が消える五月になると、人々の大洪水となって賑やかさを競う全国的に知られた桜祭りがあった。

川はこの城下町の方からくだってくる。この川の流れる一帯は林檎で有名な平野であった。町はほとんどが農家であり、米作りと林檎作りを主とし、どちらかという和林檎作りの収入がその大部分を占めるものであった。

秋に入るやいなや、黄金色に眩^{まぶ}しい稲穂も、樹林の枝々にたわわに実る紅々とした林檎も、待つ日が長すぎたかのように収穫される。

町の中心地は、南北に延びるそのコンクリート県道沿いにある表町と仲町を分け、東西のコンクリート町道を、その接点で、大町と川端町に分ける十字路沿い付近にあった。

商店街としては、仲町と大町が栄えていた。その十字路を町では「四つ角」と呼んでいた。四つ角から大町方面に二十メートル行か行かない間に、スーパーマーケット、衣服店、郵便局、書店、電気器具兼レコード店、オモチャ屋、下駄屋、タクシー営業所、などが道路を挟んで並んでいた。仲町方面へ百メートル行く間に、パチンコ店、洋品店、カメラ店、食堂、銀行三店、薬局店、湯屋、そして酒造店、などがあった。この仲町通りに、通称「赤寺」があり、縁日になると、どこからともなくやってくる香具師^{かぐし}たちなどの店屋が、道路脇に軒を連ねるのであった。

大町通りのその中心街から、もう少し行くと、左側に広場が見え、その奥まった所に町役場があった。町の生活保護を受ける人たちには忘れられない所であった。その道路沿いの隣り並びに、警察署と消防署とがあり、そこを越すと、コンクリートと石の五メートルほどの橋が架かっている下を小川が流れていた。

その石橋を渡って十メートルほど行くと、左側に、床屋や駄菓子屋に挟まれて、町の人々からは、「トタン屋」と呼ばれて栄えていた屋根葺屋やきがあった。そのトタン屋の真向かいには、町一番の材木工場を東雲町しのめぢうに営む家の小綺麗な本宅があり、煙草や御茶の小店を出していた。付近には、畳屋、食料品店、菓子店、印鑑屋、雑貨店、食堂、洋裁縫店、病院、製氷倉庫、その他の商店などがあった。

この石橋から百メートルほど行くと、町の駅があった。駅前には、最近湯が湧き出たばかりの温泉があったが、商店は二、三軒しかなく、三、四棟ある倉庫の大きさが目立っていた。

駅から大通りを二十メートルほど行くと、T字路があり、その接点の一方の道沿いを東雲町と行った。町の一番東寄りにあった。

駅はローカル線の駅で、短いプラットホームを越えた向こうがわには田畑が広がっていた。その田畑に包まれるように、町に唯一つある県立高校の校舎とグラウンドがホームに立つ人たちの目

に入っていた。

遠くに美しい山々が見える平野がそこから眺望ちようぼうできた。また、その平野を見おろすように山脈があり、駅の方角から見える日毎ひごとの朝日は、昔軍隊の訓練中に多数の兵士が遭難して死亡したと言ひ伝えられているその山脈から空に昇るのだ。

町の中心の四つ角を、駅へ向かう道とは反対に五十メートルほど行くと、その先にこの平野を流れる川に架かる三十メートルほどの木橋があった。

この木橋を越えると、城下町の中心街から十里余離れながらも、その市に編入されている青女あおな子こという村があった。

その木橋の上から遠望すると、ある日は大きくあるときは小さく見えて人々の心を把とえる休火山がぼつねんと林檎の平野を見おろしていた。山は富士山に似ていると言われ、その実名よりも地名の下に「富士」が付いて俗称され親しまれていた。山の高さは千数百メートルほどだが、周りの山脈がその半分以下の高さしかないので、山裾が美しく流れていた。この山陰に陽は沈む。

木橋は、平野の中央をうねうねと流れて日本海に注ぐ川そに股がり、城下町のある市とこの町との境界ともなっていた。

N少年の配達する地方新聞と、常勝プロ野球チームを有する全国紙の販売支店を兼ね、農業も